

## 帰属場所を求めて : ワーズワス兄妹によるスコットランド旅行(1803年)

著者	吉川 朗子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	53
号	3
ページ	87-100
発行年	2002-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001146/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001146/</a>



# 帰属場所を求めて

— ワーズワス兄妹によるスコットランド旅行 (1803年)\* —

吉川 朗子

1803年8月14日、出産したばかりのメアリーを置いて、ワーズワス兄妹はコールリッジと共にスコットランドに向けて旅立つ。コールリッジは途中で体調不良のため行動を別にするが、ワーズワス兄妹は9月25日に帰宅するまで、全43日間663マイルにも及ぶ旅をやり遂げる。そしてドロシーは、その思い出を兄ウィリアムの詩を織り交ぜながら一冊の旅行記 *Recollections of a tour made in Scotland, A.D.1803*<sup>1</sup> にまとめる。以下の論考では、この旅行記をドロシーとウィリアムの共同作品と捉え、詩と散文が互いに相補いながらどのような作品を作り上げているか、そしてこの旅行が二人の兄妹にとってどのような意味を持つものだったのかを考えてみたい。

## 1. 家へ / 旅へ

すでに指摘されていることだが、ドロシーの記述には domestic な関心が多く見られる<sup>2</sup>。宿にたどり着くと、ドロシーは女性であることの利点を生かし、台所にまで入り込んで宿の女主人と話しこんだり家族団欒に加わったりする。そして育児、料理、洗濯、掃除といった家事を女性たちがどう切り盛

\*本稿は、イギリス・ロマン派学会第27回全国大会（於札幌大学）における研究発表を加筆修正したものである。

1 本稿では Carol Kyros Walker が編纂し、写真、解説をつけた *Recollections of a Tour Made in Scotland* (New Haven: Yale UP, 1997) を用いる。William Wordsworth の詩も、この旅行記に載せられているものから引用する。

2 Walker, p.1-26; Susan Levin, *Dorothy Wordsworth and Romanticism*. (New Brunswick and London: Rutgers UP, 1987), p.80. など。

りしているかを生き生きと描き出す<sup>3</sup>。単なる観察者として一步離れた立場からスコットランドの人々を描くのではなく、彼らの生活の中へ入り込み、あたかも彼らと近所同士であるかのように振舞うのだ。

たとえば、雨の降りしきる中ローモンド湖のほとりで、一行は湖を渡る船を待つ間フェリーハウスで二人の美しい少女たちの温かいもてなしをうけるが、少女たちのかいがいしく立ち働くさまをドロシーは詳細に描き出す。彼女は濡れた服を乾かす間、ガウン、ペチコート、ウールのストッキングまで借りており、さらに着替えて体が温まると今度は当然の事のように食事を所望する。客人としての遠慮というものがなく、まるで親戚か近所の人といった態度だ。

この少女たちの歓待ぶりには兄ウィリアムも感銘を受けたようで、作品を残している。“To a Highland Girl”がそれであるが、タイトルが示すようにウィリアムは二人いた少女を一人に統合してしまい、“a very shower/Of beauty” (11-2)、“something fashioned in a dream” (12)、“vision” (15)などというように、少女を生身の人間というよりは何か美の化身のようなものに昇華してしまっている。また、彼女を家の中で忙しく働く housekeeper としてではなく、“The freedom of a mountaineer” (31)の象徴としてスコットランドの野山をさまよう存在に仕立て上げる。ドロシーの記述においては、少女たちは大勢の家族に囲まれているのに対し、ウィリアムの詩においては“remote from men” (27)と、少女の孤独、孤立感が誇張される<sup>4</sup>。そして彼は一瞬この少女の家族になれたらと願うものの、やはり自分は他所者であり旅人であることを思い出し、去っていく。最終連には、思い出を心に納めて歩きつづける旅人といったポーズが見られる。

ウィリアムのスコットランド詩を読むと、旅情に溢れているとでも言おう

3 たとえば、8月23日の項では、Clyde のそばの野原で町の人々から預かってきたリネンを洗って干すあらゆる年齢の女性たち、少女たち、子供たちの様子が生き生きと描写されている。(Walker, p.74-75)

4 この少女たちを巡るウィリアムとドロシーの反応、描きかたの違いについては、Levin も詳述している。(p.89-90)

か、たいていこうした sense of stranger, sense of motion が感じられる。ドロシーが旅先にあっても家庭的なものを求め、土地の住人の生活の中に入り込んでいくのに対し、<sup>5</sup> ウィリアムは旅人として自らの他者性を意識し、戸外へ、そして時間的にも空間的にも遠くへ向かう傾向がある。その典型的な例は “The Solitary Reaper” に見られるだろう。

この詩においても、麦刈りの作業にいそしむハイランドの乙女は、“single” (1), “solitary” (2), “by herself” (3), “Alone” (5) とただ一人であることが強調される。そして、麦を刈る土地の住人が一人であれば、そのそばを通りすぎる旅人もまた一人だ。先の “To a Highland Girl” でも語り手は常に一人称単数であって、ドロシーの記述が一人称複数形を用いて経験の共有を示していることが多いのと対照的であるが、この詩でもドロシーの姿はどこかへ消し去られてしまっている。そして孤独な旅人の耳に届いた乙女の歌は、異国の言葉で歌われているがために旅情をそそる。それは旅人の想いを、空間的に遠いヘブリデス諸島やアラビアの砂漠、また時間的に遠い過去の戦闘風景へと向かわせるのだ。想像上の旅が終れば今度は現実の旅が再開する。詩人は土地の住人の生活に関与することなく、静かにその場を立ち去る。<sup>6</sup> 「彼女の歌に終わりが無いように思えた」(26) のは、彼女の歌が終る前に彼がその場を立ち去ったからであろう。そうすることにより詩人は、果てしなき旅路を行くという感興を演出するのだ。

---

5 ドロシーにももちろん、旅人としての意識、他者性としての意識は時折見られる。“Often have I, in looking over a map of Scotland, followed the intricate windings of one of these sea-lochs, till, pleasing myself with my own imaginations, I have felt a longing, almost painful, to travel among them [sea-birds] by land or by water” (Aug.29, p.117) という箇所には旅情が感じられるし、またしばしば旅先で出会った、家事、労働に縛られている女性たちと自分を比べて、旅行する自由と経済的余裕のある自分の境遇に感謝する箇所も見られる。Levin (p.81-84) は、ドロシーが旅先で出会った家庭人である女性たちを描くことで主婦、母親ではなく旅人である自分の姿を表象しようとしていると指摘する。しかしながら、比較の問題、程度の問題になるが、ウィリアムの詩と比べると、ドロシーの回想録は家庭的な傾向を示すとは言えるだろう。

6 ウィリアムの詩では、旅人と地元民との出会いは理想化され、どちらも互いの領分を干渉することがない。それに対しドロシーの記述には、農作業にいそしむ半ダースほどの人々に旅行者の感傷を笑われたり、好奇の目でじろじろ見られたり、さらには敵意をもって相対され、宿に泊まることを拒否されたりといった不快な出来事も記録されている。

「旅情」を伝える作品としてはもうひとつ、“Stepping Westward”が挙げられるが、これもまたドロシーの記述との興味深い比較ができる詩である。これはキャトリーヌ湖のほとりを夕方歩いていたときに地元の女性と出会い、“What! you are stepping westward?”と声をかけられ、そのシンプルな言葉の響きに触発されて書かれたものとされている。第一連には、自分たちは故郷の我が家から遠く離れ見知らぬ国を旅しているという感覚、雨風や太陽から身を守ってくれる屋根もなく、ただ空だけを友として進みつづけるのだという感覚、つまり旅人としての自負心のようなものが描かれている。そして「西へ行くのですか」という挨拶の言葉に対してウィリアムは、「場所とか境界を持たないもの」「果てしなき道をいく旅」といった連想を抱く。詩の冒頭で“we”という主語によって示された「道連れにいる旅」というイメージは、第三連以降もっぱら一人称単数の代名詞が用いられることにより、いつのまにか「孤独な一人旅」というイメージに修正されている。彼は故郷を遠く離れ、親しき人の元をも離れ、ただ一人果てしなき道を行く孤独な旅人というポーズを取るのだ。

それに対し、現実においてウィリアムの道連れであったドロシーはこの日の出来事をどのように記録しているのだろうか。

We went up to the door of our boatman's hut as to a home, and scarcely less confident of a cordial welcome than if we had been *approaching our own cottage at Grasmere*. It had been a very pleasing thought, [...] that, few hours as we had been there, there was a *home* for us in one of its quiet dwellings.

(Sep. 11, p.182, Italics mine)

彼女の記述は、この土地が初めて訪れる場所ではなく再訪の土地であることを告げている。つまり、この土地はウィリアムが言うようにまったくの

“strange land” (4) というわけではないのだ。ウィリアムは “far from home” (4), “Though home or shelter he had none” (7) と言っているが、実際には二人は当てのない旅をしていたわけではなく、かつて訪れたことがあるために我が家とも思えるような場所へ帰っていくところなのだ。<sup>7</sup>

ここに、スコットランドという土地にやってきて、旅情——sense of motion, sense of stranger を純化させていく兄ウィリアムの感性と、異郷の土地ではあるけれども家庭的なるもの——sense of repose, sense of belonging を求めようとする妹ドロシーの感性の違いがはっきりとした形で現れているのを見ることができるだろう。<sup>8</sup>

## 2. 風景の中の家

ドロシーの domestic な関心は、housekeeper の観点からのみ現れるわけではない。また宿や台所、炉辺といった屋内の描写にのみ向けられるのではない。スコットランドの野趣あふれる風景を歩いているときも、彼女は風景の中に佇む家々の姿に惹かれる。貧しい家、立派な家、汚い家、手入れの行き届いた家など、どのような家がどのような場所にどのような状態で建っているかに彼女は関心を示す。ピクチャレスク理論の影響もあるのかもしれないが、家が周囲の風景と調和しているかどうかは彼女にとっては重要だ。<sup>9</sup>たとえば次のような家が彼女にとって理想の家となる。

7 ワーズワス兄妹は8月26日に、そのときはコーンリッジとともに、トロッサクスへ行く途中でこのポートハウスに泊めてもらい、暖かなもてなしを受けている。

8 John Glendening は、ウィリアムのスコットランド詩にもドロシーの旅行記にも “home/abroad” という二項対立があり、“outward journey” への志向と “a home” への志向との両面が見られるとする。(The High Road: Romantic Tourism, Scotland, and Literature, 1720-1820. (New York: St.Martin's Press, 1997), p.138-153) 確かにそう読めなくもないが、両者を比べると、傾向としては前者がウィリアムの詩に後者がドロシーの散文にという振り分けが見られるように思う。

9 ドロシーの旅行記へのピクチャレスクの影響については、John R. Nabholz の “Dorothy Wordsworth and Picturesque”, *Studies in Romanticism*, No.3-3 (1964) や; Elizabeth A

The third reach [of the glen] was softer and more beautiful; *as if the mountain had there made a warmer shelter*, and there were a more gentle climate. [...] it was *a cradle-like hollow*, and at that point where the slope became a hill, at the very bottom of the curve of *the cradle*, stood one cottage, with a few fields and beds of potatoes. [...] How quietly might a family live in this pensive solitude, cultivating and loving their own fields!

(Aug. 29, p.118, Italics mine)

ゆりかごのような地形の場所にすっぽりと収まる家、即ち建つべき場所にきちんと収まっている家に彼女は惹かれるのだ。建つべき場所というのはつまり、自然自体が家のような役割を提供してくれている場所である。<sup>10</sup> 緑に覆われたなだらかな丘、木々が陰を作り雨風や真夏の太陽から守ってくれるような場所、入り江、山麓の間、そうした shelter のような場所にこそ家は建っていて然るべきだとドロシーは思う。<sup>11</sup> 逆に周囲の風景は、家が建っているか

↘ A. Bohls の *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818*, (Cambridge UP, 1995) 等が言及している。前者によれば、'Capability' Brown 流の風景改良を批判したり、多様性の中の統一性を誉めたりする点では旅行記にはピクチャレスク美学の適用が見られる。しかしその一方で、「一般化」を拒み「個々の」人やものの「具体性」にこだわること、スコットランドの人々の生活の厳しい実情にこだわるどころなど、ピクチャレスク美学に抵抗しようとする向きも見られるというのが後者の意見。また John Glendening は、対象から距離を置き、風景を再構成するという点では、確かに彼女はピクチャレスク美学を利用しているが、この立場を利用しつつそこから引き出される自らの感情に向かおうとする内省的傾向には、ロマン派的な感性に近いものがあるとする。風景の中の家への関心についても、風景画を描くような観点からそれを眺めている場合もあれば、家の状態から中の人々の暮らしぶりを推察しようとする場合もある。「風景と家との調和」と私がここで言っているのは、ウィリアムが「地面から生えてきたかのような家」に惹かれるのと同じ感性を指す。つまり家がその土地に帰属しているということが、この兄妹にとって重要だったのではと思われる。

10 それらは "one farmhouse, sheltered by fir trees" (55), "sheltered place for cottages" (80), "sheltering warms" (126), "mountain wild set like a little nest" (126), "resting-place" (126) などといった言葉で描写されている。

11 ちなみに、旅先の風景の中に隠れ家的な場所を求める傾向は、ドロシーの7つの旅行記の中でも特にこの作品において強い。そして彼女は、そうした場所にウィリアムと二人で暮らしたいと願う。兄の結婚によって大きな精神的痛手を受けていたドロシーにとっては、この旅は Home すなわち愛する家族とともに過ごす私的で個人的な空間を探す旅であったのかもしれない。彼女にとってこの旅は、3年前ウィリアムと二人でグラスミアに家庭を作り上げたあのかのときの親密感、sense of home を再現するための旅だったのかもしれない。

らこそより愛すべきものに見えるというようなことも彼女は言っている<sup>12</sup>。またこの旅行記には、野山や耕作地などの土地が誰に帰属しているかということを示す“belong to”を用いた表現が多く見られ、ドロシーが人と場所の結びつきを意識しながら風景を眺めていたことが分かる。戸外の風景の中に家、避難所のような場所を求める感性は、グラスミアを歌ったウィリアムの作品にもしばしば見られるものであり、これは兄妹に共有されていたものだったと言えるだろう。風景によって守られた家、そして家の存在によっていっそう美しくなる風景、そうした domestic な構図に二人とも惹かれるのだ。

### 3. 埋葬場所

さて、風景の中の dwelling place のたたずまいに向けられたドロシーの関心は、興味深いことに死者のための dwelling place すなわち墓地へも向けられる。どうもドロシーには埋葬場所に惹かれるところがあるようで<sup>13</sup>、この旅行記においてもそうした記述が10箇所以上あり、また過去の暮らしの痕跡、廃墟などについての記述も数カ所を数える。いずれの場合も、彼女は人と場所との帰属関係に惹かれているようである。

Near to the white house we passed by another of those little pinfold squares, which we knew to be a *burying-place*; it was in a sloping green field among woods, and within sound of the beating of the water against the shore, if there were but a gentle breeze

---

12 “I must not forget one place [...] where we longed to live — a snug white house on the mountain-side, surrounded by its own green fields and woods, the high mountain above, the loch below, and inaccessible but by means of boats. A beautiful spot indeed it was; but in the retired parts of Scotland a comfortable white house is itself such a pleasant sight, that I believe, [...] it makes us look with a more loving eye on the fields and trees than for their own sakes they deserve. (Sep.3, p.151)

13 *Grasmere Journal* 参照。たとえば、1800年9月3日の日記には教区民の葬儀の様子への関心が示されている。



to stir it: *I thought if I lived in that house, and my ancestors and kindred were buried there, I should sit many an hour under the walls of this plot of earth, where all the household would be gathered together.* (Aug.27, pp.100-101, Italics mine)

ここで彼女は、自分がこの墓地の近くに住んでいたら、そして自分の祖先や親戚がここに眠っていたらと想像する。自分の家族が墓地に集うことを夢想し、ここに何時間も座って過ごしたいと願うのだ。ここには彼女が幼くして両親を亡くし、兄弟たちとも引き離されて親戚の家を転々としたという伝記的な事実が関わっているのかもしれない。彼女が家庭というものに飢えていた、家族一緒に暮らすことに強い憧れを抱いていたということはしばしば指摘されているが<sup>14</sup>、ここにもそうした思いが表れているのだろう。異国の地で、しかも墓地で家族団欒を想う<sup>15</sup>というのは少し妙な感じもするが、彼女にとっては、墓地という場所は死んでしまった者も遺された者も含めて家族みなが集うことの出来るところと思えたのかもしれない。もうひとつだけ例を挙げよう。

We visited the burying-ground, a plot of land not very small, crowded with graves, and upright grave-stones, overlooking the village and the dell. It was now the closing in of evening. *Women and children were gathering in the linen for the night, which was bleaching by the burn-side; [...]* there were bunches of heather hear and there, and with the blue-bells that grew among the grass

14 Susan Levin, *Dorothy Wordsworth and Romanticism* など。

15 墓地で家族のことを考えるという状況は、バーンズとその息子のお墓を訪れたときにも見られる。ここでドロシーはバーンズ親子のことを想い、ついでコールリッジ一家のこと、そして自分たち家族のことに想いを致す。(p.44) ウィリアムも恐らくドロシーの記述を読んでから書いた詩 "To the sons of Burns" で、墓地において家族を想うというトーンに寄り添っている。

the small plot of ground had a beautiful and wild appearance.

(Aug.19, p.52, Italics mine)

ここでは、死者たちの眠る場所と今生きている人々の生活の場が近接していることにドロシーは注目している。先祖たちの眠る大地の上で子孫たちが暮らしているという家族共同体のようなものが感じられる。この旅行記には他にも、墓地を同じ一族の者たちがひとつ箇所集まって眠る場所として描く箇所がいくつかあり、ドロシーの domestic な感覚, sense of home は、墓地のイメージを通して家族共同体というものへの関心につながっていることが分かる。これはウィリアムが後に書くことになる *Essays upon Epitaphs* (1810) や *The Excursion* (1814) に出てくる、家族をひとつ所に集める力を持つ墓地、地域共同体の要としての教会墓地、という考え方に通じると思われる。

#### 4. 帰 属 場 所

風景の中に見られる埋葬場所、廃墟、過去の暮らしの痕跡に対するこのような関心<sup>16</sup>は、ウィリアムの詩 (“To the sons of Burns”, “Rob Roy’s Grave”, “Address to Kilchurn Castle, upon Logh Awe”, “In the Pass of Killicrankey” 等) にも見られる。旅情、移動の表象 (空間的だけでなく時間的な移動、また物理的な移動だけでなく想像力の飛翔というような比

16 過去の暮らしの痕跡への関心としてふたつ例を挙げておきたい。ひとつは、グレンファロツホの山の尾根を歩いていると一か所だけ草が青々としているところに目が留まり、かつてここに暮らしていた人がヤギの乳絞りをしたところだと教えられ, “It was affecting in that solitude to meet with this memorial of manners passed away; we looked about for some other traces of humanity,” (Sep.12. P.186. といたく感心する場面である。過去の暮らしの様子を現在の土地の様子が伝えてくれるということは、人々がいかに土地と関わって暮らしているかを示している。また、ヴェイル沼へ向かう山道でうち捨てられた数件の集落へやってきた二人は、耕作地の跡を示す緑の草地の類稀なる美しさに感動する。ウィリアムはそうした風景の中の暮らしの痕跡 (“relics of human society”) についてオードを書こうと考えた、とドロシーは記述している。(Sep.13, P.192)

喩的な移動も含む)に向かいがちなウィリアムと、家庭的な関心に傾くドロシーの感性もこの点では重なり合い、二人の詩と散文は互いに相補いながらこの旅行記に穏やかな休息の感を与えている。では二人はそのような場所の何に興味を引かれたのかと考えると、sense of belonging——帰属感とも言うべきものが浮かび上がってくる。

たとえば“Glen Almain, or, the narrow Glen”というウィリアムの詩では、アルメインの谷の深い静けさを描くために、ウィリアムはこの谷には吟遊詩人オシアンが埋葬されているという伝説を持ち出すが、興味深いのは彼がこの伝説を完全に信じているのではないということである。彼はこの場所の寂しさが住民の想像力を刺激し、彼らが抱く“perfect rest” (22) という概念を表すためにオシアン伝説が持ちこまれたのだと推察する。(19-32) オシアンはこの谷に暮らし、この谷に眠る人々の代表として、この土地に帰属させられるのだ。ここには土地と住民との深い結びつきが示唆されているように思われる。

またスコットランドの英雄ロブ・ロイをめぐるドロシーの記述では、ロブ・ロイがいかに現在地元で暮らす人々に愛されているか、彼がいかに地域共同体の要にいるかということに重点が置かれている<sup>17</sup>。そしてウィリアムの作品“Rob Roy’s Grave”の冒頭部は以下のように始まる。

A famous man is Robin Hood,  
The English ballad-singer’s joy!  
*And Scotland has a thief as good,*  
An outlaw of as daring mood;  
*She has her brave Rob Roy!* (1-5, Italics mine)

ここには「自分はイングランド人であり、我々にはロビン・フッドがいる。

17 *Recollections*, p.99. (Aug.27) など。

彼らスコットランド人には彼らの英雄ロブ・ロイがいる」というような彼我の区別がなされていて、自分を他所者として認識していることが示されているが、「ロブ・ロイがスコットランドに所有されている」とはつまり、彼にはちゃんと帰属場所があってそこにきちんと収まっているということを示唆しているようにも思われる。

自分の居るべき場所にきちんと収まっているのは、埋葬されている人々だけではない。先にも指摘したように、ドロシーは風景の中の隠れ家のような場所にきちんと収まっている家に関心を示している。また彼女の旅行記には、自分の生まれた土地に強い愛着と誇りを抱く人々の言葉や表情が多々記されている。<sup>18</sup>

ウィリアムの場合も、旅情に満ちているとして先ほど例に挙げた詩群をこの観点から読み直してみると、こうした sense of belonging を感じ取ることが出来る。“To a Highland Girl”では、語り手は少女の家族になりたいと願いながらも結局行きずりの旅人として立ち去るわけだが、それは「この場所は彼女のために作られている」と感じたからであった。ハイランドの乙女は彼女のいるべき場所にいる。しかしその場所は詩人のいるべき場所ではない。だから彼は立ち去るのだ。“The Solitary Reaper”も然りである。乙女は自分の帰属場所で自分の言葉で歌う。しかしその場所に帰属していない詩人にはそれを理解することはできない。だから彼は立ち去るのだ。そして“Stepping Westward”では、西へ歩き続ける旅人に対比される形で、生まれ育った湖畔の村を散歩する地元の女性の姿が描きこまれている。このようにこれらの詩には、移動し続ける旅人に対比される形で自分の生まれた土地に留まる住民の姿がある。地元民が自分のいるべき場所にしっかり根ざ

---

18 たとえば、“There [In Scotland] are so many *inhabited* solitudes, and the employments of the people are immediately connected with the places where you find them” (Aug.20, p.55); “I verily believe that the woman was attached to the place like a cat to the empty house when the family who brought her up are gone to live elsewhere” (Sep.3, p.154); “I believe he was attached to the lake by some sentiment of pride, as his own domain, [...] which made him” (Aug.27, p.102) など。

して暮らしていることに、詩人は惹かれるのだ。

やがては彼自身もまた自分の帰属場所に戻ろうと考え始める。旅行記の9月18日（帰宅一週間前）の項に引用された“Yarrow Unvisited”には、「土地の者は自分の土地へ帰ったらいい。我々は我々の行くべき場所へ行こう」というような考えが現れている。この詩は、歌枕として有名なヤローのすぐ近くまで来ながら、結局訪れることなく通りすぎてしまったというエピソードに由来している。ドロシーはこのことについて二人の間でどのような会話が取り交わされたのかを記録していないが、ウィリアムの詩においては、彼女がぜひ訪れたいと主張するのに対し、彼は頑なに拒否し続ける。理由は今ひとつ判然としないのだが、彼の抗弁の中に次のような言葉が出てくる。

*'Let Yarrow folk, frae Selkirk Town,  
Who have been buying, selling,  
Go back to Yarrow: — 'tis their own,  
Each Maiden to her dwelling.* (9-12, Italics mine)

ヤローの人々はヤローへ帰ったらいい、人は各自自分の家へ帰ったらいい。しかし我々はヤローへは行かないと言うのだ。ヤローの住民ではないからだ。そして「我々には我々自身のヴィジョンがある。それを壊すのはやめよう」（51-52）と言い出す。本を読んだり人から伝え聞いた話をもとにしたヤローのイメージが自分たち二人の間には出来上がっている。それを壊すのはやめようと言うのである。自分たちが帰属しているのは、現実のヤローではなく、想像上のヤローであると言いたいのではないだろうか。

先ほども指摘したように、ウィリアムのスコットランド詩においては、ほとんど一人称複数形は使われず一人称単数形が用いられている。ところがこの作品にいたって、最初から最後まで we, our, us で統一されているということは注目される。ドロシーが一人称複数形を用いることによって兄と心理

的経験を共有していることを示そうとしたのと同じように、ウィリアムもここでは、妹と同じヴィジョンを共有していることを強調するのだ。詩の結末部分では、彼は二人が老いて旅などしたくなくなる年齢になるまでひとつ屋根の下で暮らしていることを想定し、その時に二人が同じ思い出、同じヴィジョンを共有していることを想う(57-64)。自分たちにも帰るべき場所があり、その家でともに懐かしむことのできる思い出を共有していることを喜ぶ。<sup>19</sup>ドロシーはこの作品について何もコメントしていないが、この詩が終盤に置かれることによって、いよいよ旅行記は帰郷、帰宅というトーンに向かっていく。

9月25日、帰宅の前日の項には自分たちの我が家に向かう喜びにあふれたドロシーの記述がある。

We had the fair prospect of the Cumberland mountains full in view, with the certainty [...] of reaching *our own dear home* the next day. (Italics mine)

彼女が結びに置いたのは帰宅の喜びを歌うウィリアムのソネット<sup>20</sup>であるが、ここでも一人称複数形が用いられ、ドロシー、ウィリアムという旅人同士と、メアリーとその赤ん坊ジョンという家で待つ者同士とが対比される。

Yea, let *our* Mary's one companion child,  
That hath her six weeks' solitude beguiled  
With intimations manifold and dear,  
While we have wander'd over wood and wild —

19 “To a Highland Girl”の結びでも将来年を取ったときにこのことを懐かしく思い出さだろうという結びになっているが、ここでは一人称単数形が使われており、ドロシーはこの回想から締め出されている。

20 “Sonnet composed between Dalston and Grasmere, September 25, 1803”

Smile on its Mother now with bolder cheer!

(10-14, *Italic mine*)

妻メアリーのことを“my Mary”ではなく“our Mary”といている点は興味を引く。妹ドロシーと6週間に渡る旅をしてきて彼女との絆を再び深めたウィリアムは、グラスミアの我が家は自分たち兄妹を中心に新たな家族を加えて構成されるのだということを改めて感じていたのではないだろうか。

このスコットランド旅行の目的については、兄の結婚、甥の誕生によってグラスミアのダヴ・コテージに自分の居場所がなくなってしまうかもしれないという不安を感じていたドロシーを慰めることも動機のひとつだったのではないか、ということがしばしば指摘されている<sup>21</sup>。動機についての真相はともかく結果的には、ドロシーにとってだけでなくウィリアムにとっても、この旅は兄妹の絆を再確認し、新しい家族を迎えたダヴ・コテージを自分たちの帰属場所として再認識することになったとは言えるだろう。

ドロシーの散文とウィリアムの詩とを並行して読んで行くと、ドロシーの記述には台所や家族の描写、家の表象が目立つのに対し、ウィリアムの詩にはそういったものは一切なく、むしろ旅情を前面に出しているようなところがあり、二人の感性の違いを感じさせられるが、戸外の風景を描く場合は二人とも同じような感性を以って風景に相對していることに気づく。それは風景の中の埋葬場所、廢墟、過去の暮らしの跡に対する関心であり、その共通点から再び二人の書いたものを読み直してみると、旅を通して二人が発見したのは自分の居場所に収まって暮らす人々、あるいは埋葬されている人々であったことが分かる。それを確認した上で二人は自分たちの帰属場所であるグラスミアの我が家へと帰っていき、ウィリアムはその帰属場所を舞台とした作品、*The Excursion* 執筆へと向うことになる。

---

21 Walker, p.10-14 など。